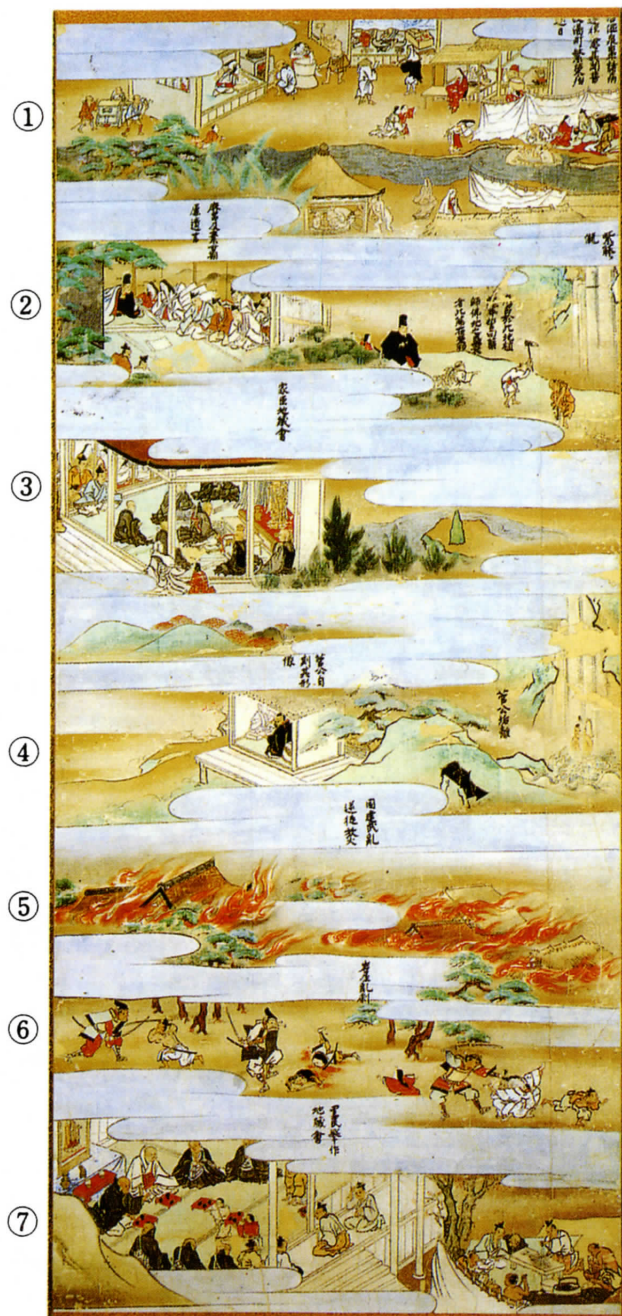


福岡県指定有形文化財

ぶ ぞう じ えん き
武蔵寺縁起

第五幅



※紙本著色 画面 68.1cm×141.8cm

縁起とは、社寺の起こりや沿革、
靈験などの言い伝え、あるいはこれ
を書き記したものをいいます。奈良
時代後期から寺院の増加につれて縁
起もふえ、平安時代後期からは絵巻
物化されていきました。これが縁起
絵図とよばれるものです。室町時代
以降、社寺の経済的な基盤が失われ
はじめると、民衆から寄進を求める
宣伝手段として縁起や縁起絵図は重
要な役割を果たすようになっていき
ました。

全5幅からなる武蔵寺縁起絵図は、
江戸時代中期（18世紀）に描かれた
とされています。

また、江戸時代中期以前に定應
という武蔵寺の僧侶によって書かれ
た「椿花山武蔵寺薬師如来縁起」が
明治期の写本としてあり、縁起絵図
とともに武蔵寺伝説を伝えるものと
して貴重です。

- ①温泉の評判は世間に広まり、湯町は大いに
繁栄した。川沿いに温泉宿が並ぶ。
- ②年老いた虎磨は、死期にのぞんで自分の名
である藤原にちなみ、藤の木を植えるよう
遺言した。
- ③亡くなった虎磨をまつる地蔵会が営まれる
ようになった。
- ④武蔵寺横に「御自作天満宮」がある。菅公
が自身の像を刻んで奉納したといういわれ
のある神社である。右側は菅公が天拝山に
のぼるに際し、みそぎをしたと伝えられる
紫藤の滝。
- ⑤建武年間の菊池氏と少貳氏の戦い（1336）
で武蔵寺が炎上する場面。
- ⑥天正14年（1586）の岩屋城の戦い。
- ⑦村をあげて地蔵会が営まれるようになった。

椿花山武蔵寺縁起 (写)

以下は武蔵寺縁起絵図第5幅にあたる箇所を抄訳したものです。

▼縁起 (写) の一部

なほ未だ朱鳥元年十月十五日卒
 給ふ家寺蓮會に任せて築師堂
 の造り葺き奉り其上に伺堂を建
 其石今尚存せり又地藏會に祈りて毎
 年頭人を定めて修行せりと更に退轉ふ
 かり未だ世遠く歳霜久きに従て七
 十五家も漸跡なく今其住せぬ処悉く耕
 作の地と爲て徒ら名残り残りし時な
 哉盛衰の運も如何とすなりなま左
 れとも席麻呂の威靈を尚盛よとて
 善業の餘慶を千載に至るも雖も其
 祭の儀備へるも其地は口も傳へ民を
 毎年此を執行せりと連綿とある今
 更年の豊山といふに
 唯恨むらくは往昔左未だ敷かり未
 堂塔建武の乱より菊池小貳
 寺戦の時焼亡せしを漸僅より再
 興せけるを又近世高橋紹運に

薬師温泉（二日市温泉）の不思議な効き目の話は次第に世間に広まっていった。病氣の人は薬師如来を信じてこの温泉に入浴すれば、どんな病であろうとたちどころに快復し、世間のみんなは「湯の薬師」と呼んでありがたがった。虎鷹は晩年になって死期が近づいたことを悟り、家来を集めて言った。「私が死んだら遺体に鎧と兜を着せ、弓矢を持たせて薬師堂のそばに葬ってくれ。そして毎年今月今日この場所で法要を行ってくれ。そうすれば豊作がもたらされ、民の安全が守られるであろう」と言い残して朱鳥元年（686）10月15日に亡くなった。家来たちは遺言のとおり薬師堂のかたわらに遺骸を葬り、その上に祠を建てた。その礎石は今でもある。また、地藏会といって毎年当番を定めて修業することは長く続けられているけれども、年月も移り変わるに従って75家もしだいにとだえてしまい、今ではその屋敷もことごとく農地となって地名だけが伝えられている。時の流れはどうすることも出来ないけれども、偉大な虎鷹の霊は今なお生きつづけ、彼の善行の報いは長い年月にわたって子孫におよび、虎鷹を祭ることは怠ることなく続けられている。その土地を求めた民も毎年この祭りを続け、そのお陰か今まで凶作の心配をしたことはない。ただ、おいしいことは、むかし嚴かに建っていた堂や塔が建武年間の菊池氏と少貳氏の

戦いで焼失してしまったことである。堂塔は再建されたが、その後、高橋紹運がこもる岩屋城を薩摩の兵が攻めたとき、彼等の手によってまた堂が焼き払われ、本陣とされたのちは廃れてしまい、今はただ、いにしえの礎石だけが残っている。薬師の尊像十二神将は、たびたびの戦争で堂が焼失したにもかかわらずに存在するのである。また、薬師如来の仏像を造った椿の株は堂のあたりに移植され、枝葉は繁り、花も年を追うごとに大きく見事になっていく。願うことは、大日如来の御光が増し、仏と民衆が互いに結ばれることである。それが花となって高く清らかな香りが世界中に広がり、大椿とともに武蔵寺の歴史がとだえることなく、いにしえの最盛期がふたたび今によみがえり、瑠璃の光明がいつまでも分け隔てなく、すべての民衆に照らされ、天地と共に長く続くことを祈る。

当時中興是心院 定應 これを修彩す

註. (1)建武3年（1336）、足利尊氏の要請により挙兵した少貳貞経と、これを阻止しようとした肥後の菊池武敏との戦い。

(2)天正14年（1586）7月、島津勢は5万の軍勢で岩屋城を包囲したが、高橋紹運以下763人全員が討ち死にをして、島津氏の野望を砕いた。秀吉の島津征伐の結果、城は破却された。